平成 22 年 5 月 15 日
北関東フォーラム
於：シムックス

中斎塾　北関東フォーラム
平成 22 年　第 5 回講話

嘘をつかない

では恒例の質問を致します。

○　昨日一日、朝起きてから夜寝るまでの間、嘘をつかなかった方？

（・・・沢山手が挙がる）

若干、手の挙がらない方もおられます。嘘をつかない一日を過ごしていると、結構爽やかです。ところがリップサービスでも何でも、一つ嘘をつくと次にその嘘を糊塗するために又、嘘をつかなければならない。どんどん人間性が歪んできます。鳩山さんの顔を見てご覧なさい。最初は純真無垢なお坊ちゃまのような顔つきでしたが、最近は悪人面になったと思いませんか。どういうふうに嘘をつくか考えながら言葉だけを選んで、その場限りの嘘をつきまくっているから、あのような顔になるのです。自分の信ずることをやっているとか、人さまの為になることをやっているとか、世の中の役に立つことをやっているという自覚があって行動している人の顔は、とても良い表情です。小沢さんは最初から悪人顔ですが、最近は一段とひどくなっていると感じます。どこにその違いが出るか。目先の嘘をつくからです。

嘘をつかないということは、その人の人生を決めてゆくし、表情を決めてゆくし、健康を決めてゆくと思います。寝る時に、今日は一日嘘をつかなかったかなと考えて、嘘をつかなければ安心して眠れますので、嘘をつかないことを一つの判断基準にされると良いと存じます。

○　昨日一日、有難うと言い、有難うと言われた方？

・・・はい、有難うございます。

○　昨日一日、良い日だったなと思える方？

（・・・沢山手が挙がる）

いつもと違う質問をしてみます。

○　今月に入ってから、何か新鮮な驚き・感動をされた方？

・・・何人かおられますので、後で体験談をお話戴きます。

爽やかな感動・新鮮な驚きというものが日々どこかで味わえると、良い人生だなと思います。

論語から今を見る

論語の素読は、すらすらと読めるようになれば入門です。次に、自分の座右の銘にしたい言葉や判断基準にしたい言葉が見つかる。日本の国の中で、政界・官界・財界それなりの仕事をしている人たちをみると、人生訓や判断の基準を論語からとっている人が多いです。そういう活用をしだすと、中の段階です。私は「利によりて行なえば、怨み多し」（目先の利益でじたばたしない）を判断基準にしています。上の段階になると、論語の中の登場人物が生き生きと動く。スクリーンで見ているように素読が出来れば上級です。

本日の論語は、公冶長第五　26～27、雍也第六　1～2 です。

公冶長

【二十六】　子曰く、已んぬるかな。吾 未だ能く其の 過 ちを見て、内に 自 ら訟むる者を見ざるなり。

孔子が言うには、もうこの世は終りだ。周りを見渡すと、自分が過ちをして失敗したなと思った時に、心の内で反省して改めようとする者がほとんどいない。

過ちがあっても自分で認めない、反省して改める者も少ないと孔子が嘆いています。

現代も同じです。鳩山さんは、よくあれだけ次から次に言葉を変えるものだと思います。普天間問題で最初は県外と言っていて、後から突かれると、「民主党の考えではなく、私自身の代表としての意見だ」と発言しました。よくも言ったものだと思います。心の内で反省して改めようと若干思うから、言葉を変えていくのだと思います。

このように今の世の中と照らし合わせて考えてみるとよろしいし、自分自身のことも考えてみると良いでしょう。何か失敗した時やミスをした時に、自分自身で反省して改めようと果たして自分はしているだろうか。これくらいの失敗はたいしたことはないと流してしまうことが多いのではないでしょうか。ここは何度も読み直しをしてみると良いと思います。

【二十七】　子曰く、十 室の邑、必 ず 忠 信なること 丘 が如き者有らん。丘 の学

を好むには如かざるなり。

孔子が言うには、わずか 10 軒の家庭しかいないような小さな村にも、必ず私のように忠孝・信義の念に篤く学問が好きだという人間はいるはずだ。しかし私のように学問を真剣に追究して飽きない、継続して毎日学問に打ち込む人物はいないだろう。

私と同じようなことを目指す人間は多いけれども、私ほど勉強している人間はいないだろうという孔子の自負が窺えます。

『漢字の起原』を書かれた加藤常賢先生は、漢字の解釈について、これはこうであると断定して説明されました。「私ほど人生をかけて漢字を追求している者はいない。その私が言うのだから間違いはない」と言っておられました。それだけの自信があって、周りにも解釈について反論をする人がいなかったそうです。

今の学者で、こういうことを言える人がどれほどいるでしょうか。ノーベル賞を取った先生方はその専門分野に関して、このように言えるのだろうと思います。学問に限らず、武道の鍛錬や人生の追求についても同じだと思います。私ほど熱心に鍛錬した、或いは生涯かけてやり抜いた者はいないと言い切れるだけのものを持っている人は、素晴らしい人生だと思います。

雍也

【一】　子曰く、雍や南面せしむべしと。仲弓子桑伯子を問う。子曰く、可なり、簡なればなりと。仲弓曰く、敬に居て簡を行い、以て其の民に臨まば、亦可ならずや。簡に居て簡を行わば、乃ち大簡なること無からんやと。子曰く、雍の言然りと。

南面せしむべしとは、公の場所では君子はいつも南に向いて座り、臣下は北に向かって座ります。ですから人の上に立つことが出来る人物を南面といいます。

子桑伯子は、政治家で老子流の学問をした人だろうということですが、よく分かりません。

孔子が弟子の仲弓を評して、「雍（仲弓）は人の上に立って民を治めさせてもよい人物である」と言いました。

仲弓が「子桑伯子はどうですか」と孔子に聞いたところ、孔子は「非常に寛大な人物で、鷹揚だから良い」と答えました。

仲弓が「恭しさや慎みを忘れずに、ポイントポイントを間違えないで大まかなことをや

っているのなら良いのだけれど、大まかな人間が大雑把なことをすれば、しまりがなくなってどうにもならないというようにはなりませんか」と聞きました。

孔子が、「そういう見方はある。お前の話はもっともだ」と答えました。

会社や組織の中でも、ポイントポイントを押さえて人に任せるということは良いことです。トップになったら実務は人に任せて、これだけは駄目だというポイントを押さえておけば良いだろうと思って、今、私はシムックスという会社の代表取締役会長をしています。会社の中を取り仕切っていく、上になればなるほど自分で仕事をしないことです。自分で仕事をすると、自分が疲れます。体力を温存しておかなければなりませんから、周りの人に仕事を渡した方が良い。仕事を渡して、その人が伸びていないようであればアドバイスを与える。そうすると急激に伸びる人もいます。上にいる人間は、出来る限り人を伸ばすように伸ばすようにしてあげれば良い。それが「簡」という文字だと思います。

【二】　哀公問う、弟子 孰 か学を好むと為すと。孔子対えて曰く、顔回という者有り、学を好めり。怒りを遷さず。 過 を 貳 びせず。不幸短命にして死せり。今や 則 ち亡し。未だ学を好む者を聞かざるなりと。

哀公が孔子に、「お弟子さんたちの中で、誰が学を好みますか」と聞きました。

孔子が答えました。

「顔回という者がいる。学び（克己の修行）を深めても、怒るということはまずない。同じ過ちを二度としない。後継者として素晴らしい人物であったが、残念ながら早死にしてしまった。今は弟子の中に、学問を好む者はいない。世の中を見渡しても本当に学を好む人間はいないし、そういう評判も聞かない。非常に残念だ」

顔回は 32 歳で亡くなったということですので、十分な一生ではないかと思います。孔子は 73 歳まで生きましたから、自分の年と照らし合わせて顔回は早死にだと言っていますが、その時代であればそれほど早死にではないと思います。正確な数字はありませんが、当時の寿命は少なくとも 32 歳より短かったはずです。ですからこれは、孔子の愚痴だと思います。自分の心の中に、これだと思う人間が顔回の他にいなかった。これはやはり不幸だと思います。後継者を一人決めたとして、その人間が駄目だったら次はこの人、というように手を打っておかないと孔子のように愚痴をこぼすことになります。

判断基準を持つ

足るを知るという言葉を、仕事や日常生活の中で時々反芻して戴くとよろしい。私は「利によりて行なえば、怨み多し」という言葉を判断基準としていますが、それと「足るを知る」とは、完全に一体化しています。表現は違いますが中身は同じものだとお考え下さい。渋沢栄一が唱えた道徳経済合一説と、三島中洲の唱えた義理合一論も中身は同じです。このように表現は違っても中身は同じというものは沢山あります。ですから自分の言葉で、良いなと思うものを捕まえるとよいと思います。

自分自身が仕事をする上で、日常生活を生きていく上で、大事な場面が時々あると思います。右か左か迷う時に、何かの判断基準によって決めるのが良いでしょう。

大事なことを決める時に、私は何にでも通用する判断基準を持っている、という方はおられますか？

・・・はい、有難うございます。

判断基準を持っていると、非常に楽です。判断基準を持たないと、右に行くか、左に行くか、どう判断して良いか分かりません。

出処進退を決める時にも、自分自身の心の中に判断基準を持っているかどうかだと思います。世に出る時は人様に引き上げられ、退く時は自分で決めるべきだと言われますが、なかなか自分で退を決めることは難しいことです。

渋沢栄一の判断基準

先日、郡山市で福島新樹会という勉強会で講演をさせて戴きました。「渋沢栄一　人生の節目」という演題で話しをしましたので、渋沢栄一の判断基準について申します。

渋沢栄一は 17 歳の時に世の中に対する公憤を持って、22 歳あたりで尊皇攘夷の水戸学にかぶれました。24 歳の時に、高崎城を乗っ取り、横浜の外国人居留地を焼討ちするという倒幕計画を立て、決起寸前で止められて親元から出奔しました。そして一橋慶喜公に仕えます。

一橋家に仕官する際、おもしろいエピソードがあります。倒幕計画が未遂に終わり京都に逃げた渋沢栄一は、一橋家に召し抱えられなければ幕府の密偵に捕まって首をはねられる状況でした。一橋家の用人筆頭の平岡円四郎に頼んで家来にしてもらったのですが、その時に、「窮地に陥った挙句に拾われたというのはなく、一橋家に見込まれて家来になりたい。まずはお殿様に建白をさせて欲しい」と申し出ました。平岡円四郎の計らいで、慶喜が馬の遠乗りに出た時に、渋沢栄一は馬と一緒に駆けて、新規召し抱えの者だと紹介されて、

慶喜の了解を得て採用されました。渋沢栄一は小太りで走るのが苦手だったのですが、必死になって走ったそうです。「あの時、自分はよくぞ走ったものだ。体力のある限り走り続けて、もういいぞと言われた時には、へたへたと座り込んでしまった」と後で述懐しています。

その後、一橋家に仕えて信用を得ていくのですが、いくつかの関門を潜っています。渋沢栄一が一橋家に仕えた時には、お金を使い果たしていて一文無しでした。周りの人たちから掻き集めて 25 両を借りました。それを、四両一分のお給金を貯めて全額返しました。当時の志士たちは借りたお金は返さないのが当たり前だったようですが、渋沢栄一は４ヶ月か５ヶ月で 25 両を全額返済したので、大した人間であると信用を得ました。

二つ目の関門は女性をあてがわれた時です。当時の京都は料亭外交が盛んでした。各藩の用人たちは情報交換という名目で、よく宴会をしていました。一ツ橋家も同じようなことをしていました。一橋家に仕官して、渋沢栄一は平岡円四郎から篤太夫という名前を戴いていました。平岡円四郎が暗殺された後、後任になった黒川という用人に連れられて或る料亭に行きますと、夜具が敷いてあって女性が一人います。渋沢栄一は大変女好きの人でしたが、これはおかしいと思って、血相を変えて部屋を飛び出して帰ってしまいました。すると黒川用人が追いかけてきて、渋沢栄一を使うにあたって身持ちが固いかどうか調べたのだと言いました。女性に関する話で渋沢栄一が関門を潜り抜けるとは思いませんでしたが、よくぞ断ったものだと思います。

更に、こういうエピソードもありました。大沢源治郎という幕臣が倒幕を企てて武器弾薬を集めているという情報があり、その捕縛にあたる人物が奉行所にいないので、一橋家に依頼がありました。一橋家では篤太夫を出そうということになり、渋沢栄一が捕縛の正使として出かけて行きました。大沢源治郎は腕も立つので、副使に新撰組を付けるから一緒に捕まえてきてくれということでした。新撰組の屯所に行って近藤勇と話をし、新撰組が先に行って捕縛をするから、その後で正使として罪状を口上すればよいと言われます。渋沢栄一は腕に自信もありましたから自分が先に乗り込むと主張し、土方歳三もこれを了承しました。渋沢栄一は大沢源治郎が泊まっている寺に真っ先に乗り込んで、大声で奉行の命により捕縛する旨を伝えると、相手はその気迫に呑まれて神妙に縄を受けました。

こういった関門を潜り抜け、渋沢栄一は金にも固い、身持ちも固い、尚且つ腕に覚えもあるということで、一橋家の中で信用を得て、出世していきました。

27 歳でフランスに洋行しました。パリで万国博があり、一橋慶喜が弟の昭武を洋行させ

るにあたって、昭武の周りには禽獣夷狄は切り殺そうという人間ばかりでしたので、そのなだめ役として、更に、金勘定の才能と腕に覚えもあるということで、渋沢栄一に随行の打診をしました。渋沢栄一は新しいもの好きでしたから、喜んで同行したわけです。

渋沢栄一がパリにいたのは実質的には 1 年 10 ヶ月でしたが、帰って来た時には徳川幕府は倒れて明治新政府になっていました。渋沢栄一は明治政府に請われて任官します。そのきっかけとなったのは、明治新聞の記事です。

> 静岡藩に渋沢栄一という者がいる。彼は徳川昭武公に随行して先年フランスに渡航し、このほど帰朝したが、フランス滞在中二万両の予算を残し、これとは別に自分一己の才覚で四万両の利益を貯えた。この四万両を静岡県内の生活困窮者に分配し、自分は一銭も私しなかった。

この記事を目にした郷純造という明治新政府の大蔵官僚に呼び出され、本人は明治新政府に仕える氣はさらさらなかったのですが、任官したという経緯です。

「渡航費用を残し、尚且つ、自分一己の才覚で余剰金を作った」とありますが、これはフランスの鉄道債券と国債を買ったのです。それが利益が出て４万両になりました。普通は自分で使ってしまうのでしょうが、渋沢栄一は藩に返しました。それは非常に珍しかったわけです。

渋沢栄一の判断基準は「利によりて行なえば、怨み多し」です。自分自身が納得のいく金儲けであれば何ら恥じることはないけれども、心にやましさが残るような金儲けは、後々とんでもない厄介事が付いて来るからやらないと決めたわけです。

渋沢栄一のことばかり申しましたが、世に処する時の判断基準というものは、人生ここぞと思う時に役に立ちます。大きな判断をしなければいけない時、小さな判断の時、全てに使える判断基準を持っていなければいけません。生涯を貫く判断基準を一つ持っていると、人生は間違えないで進んでいくことが出来ると思います。どうぞ自分自身の判断基準をお持ち戴くとよろしいと思います。

六中観

本日のテーマは、安岡正篤先生の「六中観」を取り上げました。私はこの言葉が非常に好きでございます。

「六中観」

忙中有閑　　苦中有楽　　死中有活

意中有人　　壷中有天　　腹中有書

日々折々の生活をしていく中で、忙しいなと思ったら、時間を作れば良いのです。忙しい・忙しい・・・と振り回されていると時間は取れません。本当に忙しいと思ったなら、自分の閑を作り出せば良いのです。閑は作れます。例えば社長業を譲れば良い。仕事を一つ二つ減らせば良い。「忙中閑有り」の閑の作り方、「死中活有り」の活の作り方が重要です。

これから破産や倒産という話が沢山出てくると思いますが、人間が間違えるのは、茹で蛙になっている自分が分からない時です。自分自身の身の回りに些細な兆候が起っている時に、それが日常と同じ普通の動きをしているのか、非常事態が起きる兆候が出ているのか、見抜く力を持っていないと茹で蛙になります。危ないということが自分で分かれば、手を打てます。非常事態の兆しは、そっくり返っていたのでは見えません。非常事態だと感じる感性、アンテナの張り方が今、一番大事だと思っています。周りは皆、平常だけれども、自分自身が非常事態になることはいくらでもあります。そういうことを見るには、常にアンテナを張って、自分自身がまっさらになっていないと見えてこない。肝心なのは、自分は今、茹で蛙になっていないか、時々見直しをしてみることです。出来れば１ヶ月に１回は茹で蛙の棚卸しをするが良いと思っています。

本日の講話は以上で終了です。有難うございました。